

KODAK COLOR CONTROL PATCHES

© The Tiffen Company, 2000

LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

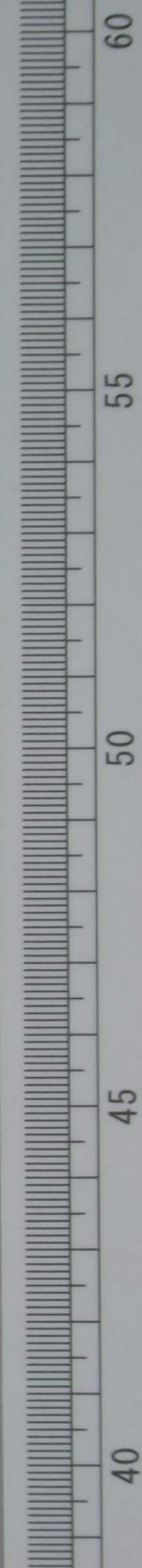
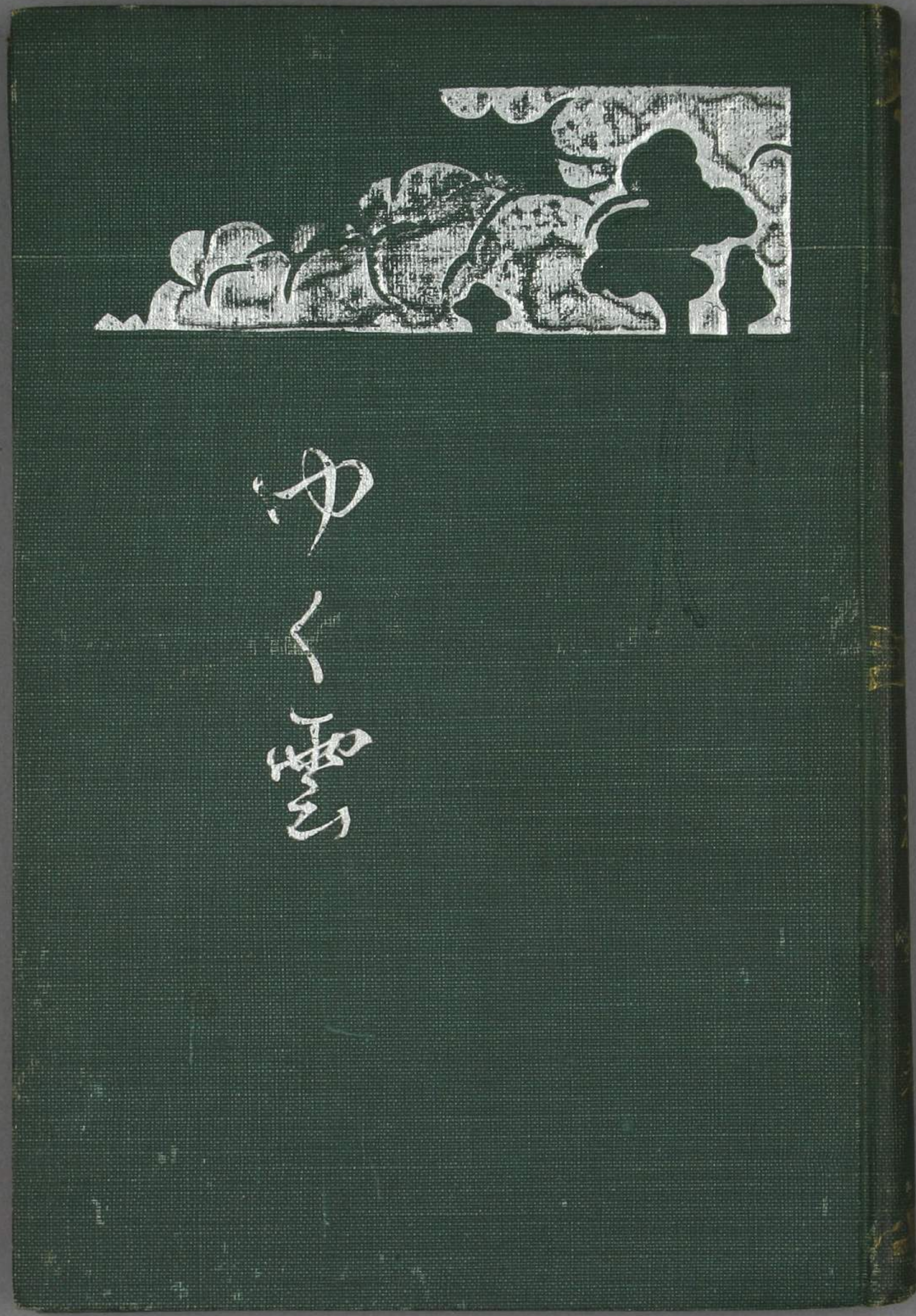
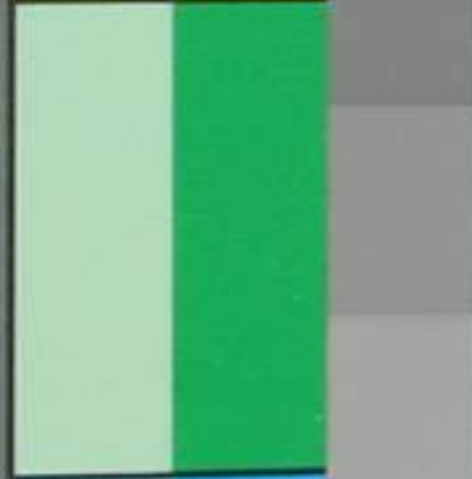
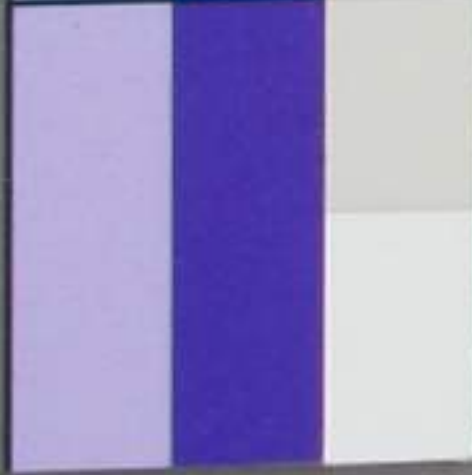
Red

Magenta

White

3/Color

Black



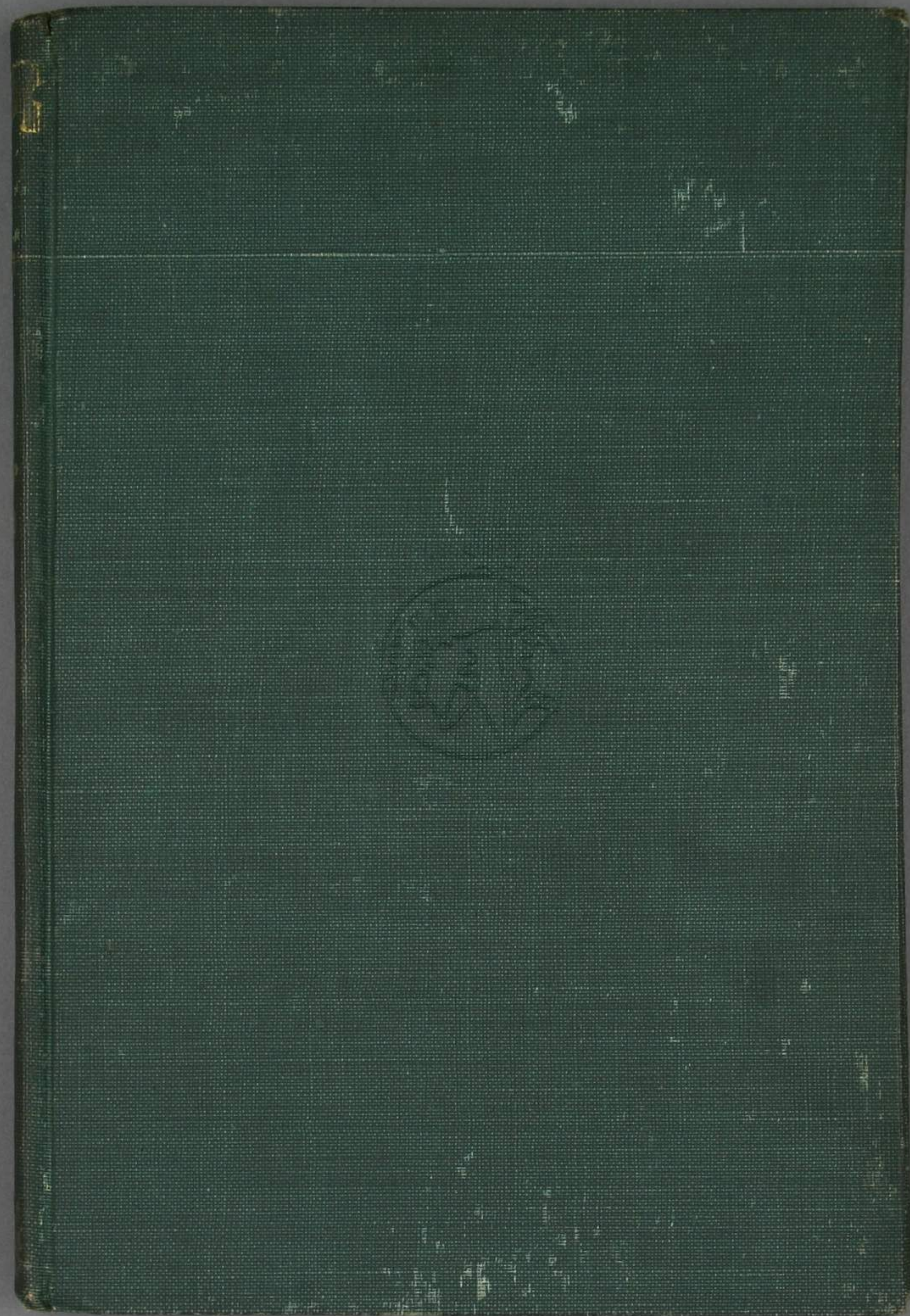


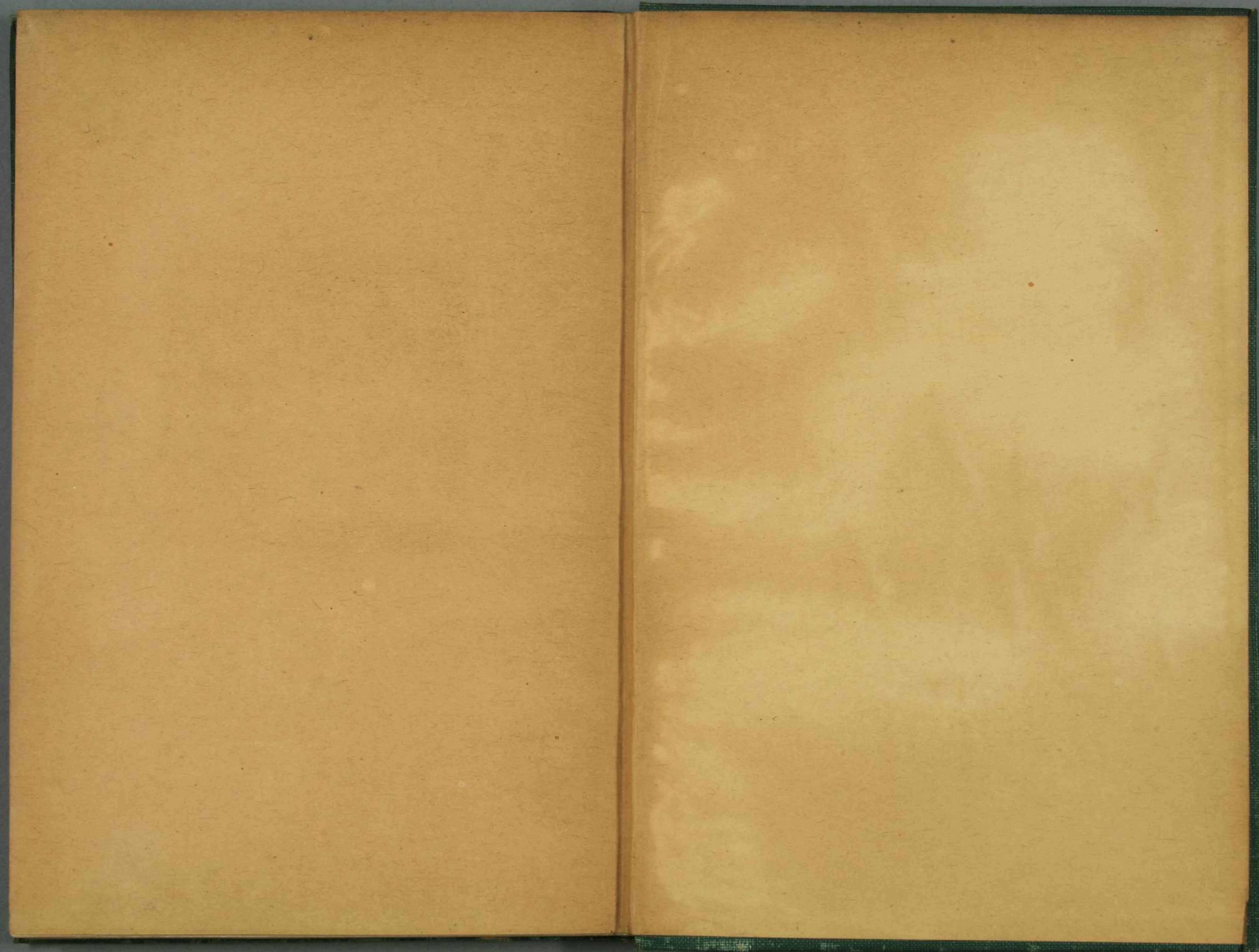
申
く
雲



花
分
著







ゆ



花
外
作



古野なる小詩、あつめて『ゆく雲』といふ、乾燥軽浮なる現下に、多少の血涙を灑がば願ひ足れり。

著者

目次

馬上哀吟	一
糸車	四
雲髪	八
蝶賣娘	一一
白菊に	一四
雪の家	一六
米磨ぐ女	一九
石わる子	二一
秋の夜	二三
墳墓を撫して	二四

河邊の嘆	三二
闇中田鼠に告ぐる歌	三四
月と吾と	四三
支那パイプ賣	四五
少女と雀	五一
血歌	五四
堇と別るゝ歌	五六
同情	六二
春野のうれひ	六三
梅花	六八
波濤を望みて	七〇
花賣女	七三

雞の歌	七五
山茶花	八四
雲に與ふ	八五
小 囚	八八
孤槍吟	九五
犠 牲	九八
紡績工女	一〇一
螢を放ちやりて	一〇五
葡萄酒	一一三
故 園	一一五
星	一二一
血、涙、心	一二四

森のさすらひ	四
袖はいとはじ	一三七
空罽買	一三九
心は胸に	一四三
雨雲	一四五
日向葵と人生	一四七
戀しの雲	一四九—一五一

目次終

兒玉花外作



駒の歩みの遅さかな
 桔梗、小萩は咲き亂れ
 露にたふるゝ女郎花、
 鶉啼くてふ野を過ぎて、
 その名も高き信濃なる

浅間の山に來りけり。
こゝ秋風の蕭條と
麓を辿る旅人吹き、
松のみ多しこのあたり。

仰ぎ見すれば、空ぎはに
浅間の山の吐く煙、
鳥は迷はず、木は生ひず、
いきたる物の影も無く
高く聳えて、遠く延ぶ。
山の威靈におのづから

首くだれば、わが袖と
馬の鬣、灰白し
夕陽をよけて進みゆく
まごの笠にも積るかな。

壯なるかな永劫に
天に炎をあぐる山、
小さき胸に火は燃えて
われも天地に怨みあり、
人の思想を壓すなる
世をば焼かむか、憤恨の

火にて燃果えむかおのが身は
寧ろみ山よ、もろ共に
裂けてくだけで冷えんかな、
呪咀の世にぞ吾は歸らじ、

糸車

傾く廂、夕顔の
すがりて咲ける窓に座し

鬢もほつれし花嫁が
歌ひつ廻はす糸車
紡げる糸に秋の風

あゝ山寺の鐘の鳴る、
愛しの脊子は鋏を肩
吾家に歸り暮る頃を
雲のかなたの満洲に
戈を横たへ陣の中。

婚禮衣をたゝむ、軍に立つ、
をつとよつまと寄りそひし
鳥と鳥との憂き別れ
日本の野べと、支那の原
呼べどこたへも波の外。

夏は日にやけ農夫の
額に汗の流れしが、
敵の砲火に照されて
瀧なす血潮流れずや
人草、劍に刈りながら。

思ひもつゞく糸車
糸のきるれば良人の
生命いかにと胸さわぐ、
心をこめて紡げども
誰がため織らむ冬衣。

糸より長き悲哀に
點灯も忘る窓の内
いつか射し入る月の影

糸いとに涙なみだの落ち懸かり
露つゆの白玉しらたま光ひかるなり。

雲 髪

いつか**いづこ**を流ながれ來きて
涯はてなき天路あめぢゆく雲くもよ、
こがねひぐるま、日ひにこがれ
暗く愁ちさわが腫めぞ雲戀くもこふる、

あゝまどはしの浮うける君きみ。

星ほしと星ほしとはあまの川がは
逢あふ夜よもあらめ、雲くもと人ひと
觸ふるゝその日ひの世よにありや、
土つちを踏ふまへて嘆なげきけり
この身み溶とけよと亡はろびよと。

袖そでに涙なみだは人ひとのわざ、
放逸はじなる風かぜの子こが

つれなく雲を下界に吹けば
驚きて泣くけしきかな——
やさしの日の男晴すまで。

自由の華の郷もとめ

北に南に漂泊ひて

われや倒れぬ、血を塗りぬ、

さても運命かむしろかの

おほ空、雲と狂はなむ。

雲よ、地に伏すあはれまば
御髪垂れずや五千丈
腕に捲きてのぼらまし、
はかなく天に消えぬとも
吾れもとよりの願ひなり。

鰈賣娘

鰈買はずや、鰈めせや、

解かば幾尺、黒髪の
上にひらたき桶載せて、
鯨買はずや、鯨めせや、
聲も朗らにたをや女が
露を踏みく呼ふなり。

見よや、新鮮のこの魚を
鯨は死にけり此の朝け、
市の貴人、かはざらば
妾も死せん貧しさに、
鯨買はずや、鯨めせや、

味美き魚よ、青海の。

唯一つの魚だにも
浦の若人、わが父の
一葉の舟に海の上
波に命を懸けて獲ぬ、
鯨買はずや、鯨めせや、
命の味はいと安價し。

白菊に

路傍にたてる夏菊の
露にかわくぞ憐れなる、
空なる母が小菊には
夜の間露を置き忘れ、
夕まぢえぬ姿かな。

蝶花鳥に生命なる
泉掬まむも遠ければ、

せめて涙にうるほさむ、
身は賤しくて貧しくも
涙に富める吾れなるを。

否よ白菊、悲哀の
人の泪の落ちもせば、
あへなく花や凋むべし、
平和あふるおほ天の
露に育てる花なるを。

あはれ、優しく美はしく
清きいましに幸あれや、
劍の道に行きくれて
ひとりかわける吾が魂は
人の涙の露に消ぬべし。

雪の家

雪山おろし肌寒う、

鴉も吹かれ杜にゆく
こゝ荒村の夕まぐれ、
笳をとめて見わたせば、
細き烟の壁を洩れ
軒端傾く雪の家。

憂身のうへに憂きことの
つもるに似るか、天の雪
重きが上に積りなば、
貧しき人の家脆う
親子の命ともし火の

はかなや雪に消えぬらん。

嗚呼、文明のなやみ見よ。

『自然』の雪の力より

鐵の社會の壓迫の

重さ感ずる一家族

かゝる時世と白雪の

雪の中なる家の淋しさ。

米磨ぐ女

釣瓶の水に風たちて

夕日さみしき井戸の端、

米とく若き下婢よ、

赤きは輝の手を休めて

何を思へる、その顔容。

人に知らさて花の如
胸に秘めたる戀ゆゑか、

身の悲しさと貧しさを
啣つか、さては過失ちて
小さき心を痛むらん。

やよや、少女よ泣く勿れ、
こぼれて落つる一粒の
米は惜むも、汝が涙—
玉の價を人知らじ、
雀もなみだ拾はむや。

石わる子

河原に下りて石割る子らよ、
鶺鴒かへりて今巢にあるに
星は光りて空にみえしに
腕をふるひて疲れはせずや。

水は昨日に流れ去りしに
薄き命を何にとむる、
枯れたる草に鹿の如くに

立ちて運ぶはパンの石かや。

秋の夜

秋の夜寒み、虫の音ほそく、
露はしとどに、木の葉重う、人ぞ沈む。
夜の守りの、神やゐます、
雲の流れの、長き御髪の、星は花簪。

山もとかすか、燈火の里に、
擣つ遠砦、聲ぞ悲し、妻か乙女。
近き小舎に、窓を洩れて、
鳴る糸車、糸に涙を、繰りて歌ふ。

月かげ冴えて、雁は渡れり、
征衣の人よ、風のいづこ、仰ぐか今。
高梁の褥に、妻や憶ふ、
散るはもみぢ葉、霜の劔に、あはれ命。

墳墓を撫して

吾身一つをたもちかね
定めなき世の面影を
見せて漂ふ浮雲の
空を眺めつさまよへば
いつしか来る薄原
山の裾より吹きたる
風に悲しき調べあり
盡させぬ長さ響あり
茂れる薄かさわけて

迎ればそこに墳墓の
一つ淋しく立てりける
瘦せたる手をば差伸べて
撫づれば怪し吾胸に
無限の思わき来る

「やよ墳墓よ汝はしも
胸に文字をば刻まれて
闇と光のそが間に
何時の世よりか佇める
我は此世に生れ出で

早くも暗にたち迷ひ
塵にはむせび風に泣き
人の心の情なくて
涙にもろき男子とは
いつしか我はなりにけり
春夏秋やはた冬の
四時の景色を夢とみて
東の空にあかくと
昇る朝日の光より
夕の影を喜びて
草葉の上におく露の
うすき光を真とし

人の心の闇路をば
辿りて年を経たりけり
此世は暗かさりながら
神より受けし己が身の
我は涙を揮ひつゝ
なほも闇路を辿らなん
躓く石のあらばあれ
陥る谷のあらばあれ
汝の立てる下こそは
我の行くべき所なれ
永久の平和のある所
生命の泉湧くところ

愛と自由の住む所
輝く光明みるところ
我が持ものと誇りたる
わづかの智慧と力をも
人を恨むる心をも
悪魔の前にぬかづきて
あけてくれ日ごと罪犯す
弱き小さき心をも
穢き土に投げ捨て、
汝の下に入るまでは
我は忍びて水銀の
杯とても飲みもせん

氷の刃受けもせん
朝な夕なに泣きもせん
やよ墳墓よ、
人には見えぬ我胸に
深く刻られし文字をみよ
未だめぐる血のゆるやかに
響く太鼓の春の海
熨せしが如きわが胸に
ほられ初めにし文字を見よ
『苦痛』と深く刻まれし
動きて止まぬ文字をみよ
されどもつらき此文字も

汝の^{いまし}下に^{もと}往^ゆかむ時^{とき}
 夢^{ゆめ}の如^{ごと}くに消^きえ失^うせて
 『平和』の^も文字^じの現^まはれん
 あゝ墳墓^{ふんぼ}よ〜
 固^{かた}く冷^{つめた}く醜^{みにく}しき
 汝^{いまし}に言^{ことば}葉^はあらねども
 親^{した}しく我^{われ}に語^{かた}りたり
 眞^{まこと}實^{じつ}を我^{われ}に語^{かた}りたり
 偽^ぎ善^{ぜん}の赤^{あか}き狐^{きつね}火^びの
 闇^{やみ}路^ぢに迷^{まよ}ふ旅^{たび}人^{ひと}を
 賺^{すか}し惑^{まど}はす今^{いま}の世^よに
 汝^{いまし}に逢^あふの嬉^{うれ}しさよ

聞^きけや此^{この}世^よの夕^{ゆふ}暮^{ぐれ}を
 告^つぐる野^の寺^{でら}の鐘^{かね}の聲^{こゑ}
 見^みよや埒^{れぐら}にかへりゆく
 翼^{つばさ}重^{おも}げの群^{むら}鴉^{からす}
 いざ我^{われ}ととも歸^{かへ}らなむ
 草^{くさ}踏^ふみ分^わけてかへらなむ
 悲^{かな}しくつらくある時^{とき}は
 またも汝^{いまし}を尋^{たづ}ね來^こん」
 名^な残^{ごり}惜^{をし}くも立^{たち}あがり
 道^{みち}を急^{いそ}げばざは〜と

薄吹きまく夜嵐の
陰府に誘ふ聲すごし。

河邊の嘆

提琴を櫻樹に懸く隅田の河邊、
花雨る淨土へ、うつゝな座せば
白帆、愁をのせも寄らくに
わが胸はやも感興に満ちて

紅涙ほろると、染めぬ春水。

なみだを知るや、浮く都鳥、
桂男の悲歌は千古ゆ
脚にひまなき水禽とし生れて
詩の偉力に遊子ぞ泣くよ
濡れし面の映るを水鏡。

あゝ情波ゆく美岸去り思ふ
春も日も暮る、人は世潮に

夢む、漂ひ——随ふ鷗、
いぎ、かへらまし水濁れるに
獨り逆らふわれや白鶴。

闇中田鼠に告ぐる歌

晝來し墓地の側の
畠につきし一筋の
田鼠の跡をとひみれば

夜風は枯れし草吹きて
魂魄さそふ響あり。

月は缺ぐれどわが胸の
あふるゝばかり悲哀を
泄さんよしもありやとて
鼻啼ける森もぬけ
さみしき野路たゞひとり。

終日闇に棲む友よ、

生れて人の毒の矢に
心の眼傷きし
人ぞ、青菜のそよとだに
聴かずや、あはれ土の下。

人と獸のけぢめあれ
同じ非運のわが儔よ、
饑ゑし鼠の厨にて
板を穿たむそれならて
力の限り掘りしよな。

それも光を見んためか、
頭の上の輝きは
汝に似たる醜しき
衣まとへる農夫の
振りあぐ鍬のひかりなり。

やめよ、益なき企計の
身をば亡ぼすわざどかし、
吾も幾歳もとめしに
天の恵やあらざりし

たゞ欺かる幼童のみ。

いかに荒れしよ、冬の野邊、
木の葉を家の生物は
霜と嵐に苦しめり、
雪の筵とかはりなば
小鳥や餌に悲しまむ。

さらば安かれ憂なし、
造化にへだてやあらなくに

人のさだめに一片の
土塊だにもなき人に
比べば富めり、むぐらもち。

よしや生れて卑しくも、
香もなき泥も饒なり、
貧しき人に一粒の
米も汗なる眞珠なり
價なくして得られんや。

人と人との血に塗れ
嫉妬、鬭争、わづらひの
塵の地上をおもひみよ、
さても静けき土の中
天上の福にぞしかねども。

都も鄙も腐敗れたり、
悪魔の如くわが息を
なれに吹かなん願くは
族と共に、咒はれし
人住む家の底をほれ。

是れぞ空しき夢ぞかし、
死こそ一切のをはりなれ
汝のすぎし道のごと
人や喘ぎて行く終極は
たゞ一すぢの墳墓のみ。

物影なきを窺ひて
田鼠や穴を出てもせん
人や一たび埋れては

またも見ざらむ現世を
元の土へと歸るらん。

弱き小さき獸とて

光はなくもふさはしき
處あたへし神に謝せ、
情も氷る寒き世に
吾れ放たれて恨あり。

明旦は勤しむ農夫の

來らばこゝにつぶやかむ、
消してかへらめいざらば
春は花咲き照すとも
姿あらはすことなかれ。

月と吾と

小夜は更けたり、月みれば
つきも吾身を照らし見る、

月はみ空に、われはしも
荆棘の地にさまよへり、
めぐり逢瀬のあらなくも。

古郷いでし、甲峽の
葡萄を染むる露に涕き、
福井の雪に泣きしとき、
人の面より親しみし
月よ、わが影いつまでか。

永久の月影、消ゆる命、
あまり戀しさ、はかなさに
月を抱いて走らばや、
暗黒をこのむ人の世は
光明奪ふも惜まじな。

支那パイプ賣

われ西の京に在る日この異邦人を見たり

曳船かよふ高瀬川

橋の袂に支那人の
出すや小さきパイプ店

店は硝子の箱一つ
小高き臺の上にする
中にパイプを並べあり

支那の石にて作りたる
物よ木片に腰かけて
道往く人の買ふを待つ

色はさめしも國風の
服を着けたり天が下
歩むに變へぬ扮装

さすがに人は集まれり
こは珍らしと思ひてや
老も若きもとりに圍む

自ら稱ふ同胞の
哀れをみても涙なき
人のいかでか異邦の

人に情を表はさん
眼に嘲りのひらめきて
笑ひを含む口の内

時に罵り過ぐもあり
たま／＼買ふと手を觸れば

人は品ともなぶらるゝ

パイプの虧は忍ぶべし
國の虧をば支那人よ
如何とするぞさり乍ら

あゝ愚の群よ耳の塵
拂ひて聽けよ戦ひに
敗けたる國の人といへ

正しくなせる生業ぞ
海を渡りて淫を賣る
自國の婦女といづれぞや

麥酒舞踏に洋行か
汝の國に譽れある
紳士學者といづれぞや

巴里に行きたる唄女は

博覽會の出品か
嗚呼極東の美術國

少女と雀

貧しき少女米買ひに
三町さきの家に往て
社をぬけて歸りみち

袖そでに掩おほひし風よろ呂敷しきの
解とけて悲かなしや過あやまちて
命いのちの米こめのこぼれけり

人ひともやあると小走こばしりて
顔かほ赧あからめつ立停たちどまり
後見あとみかへれば憎にくらしや

隙すきを視うかがひ二三羽ばの

雀すずめの來きたり啄ついばめり
人ひとのみぬ間まに幸さちありと

優やさしき心追こころおひもせず
また過あやまちて掌てをうてば
雀すずめはチ、と飛とんで行ゆく

血歌

常陸の海邊、わが携琴ふるふ、
波肌女神に戀ひ濡れもせね
胸の血騒ぎ歌の亂れや——
愁ひ雲女ぞ追ひ來て捲くを。

天妃花島、雪散る巖根
綸垂る漁人、裸童去にてゆ
夕暮浦に燃え立つひとり

青波、死濤よ、わが熱血嘲る。

大み國船、寶財も藻屑
南山、北市、風雨を放射つ——
海の力にくらべば血浪
人間の思潮のそも何え打つ。

天地覆す浩歌ならなくは
頭ぞ碎き岩に血塗らん。

堇と別るゝ歌

夕暮ヒ、と啼く鹿の
齒より漏れけむ青き葉の
流れて下る一葉舟
見送りがちに谿河に
そひつゝ上る山の路。

朝日の光あざやかに
枝うちかはす樹をもれて

鳴くや百鳥樂しげに
あしたの歌を唱ふなり
吾は思ひに沈みつゝ。

いとも悲しき人生の
旅路あゆみし若人の
その初戀に遇へる如
露にぬれたる一むれの
堇みしこそ嬉しけれ。

山の香たかくにほひきて
木の葉に見ゆる風吹けば
濃き紫の愛らしき
眼をもてる花と花
叫きあひぬ傾きて。

優しき花に向ひては
かたくなしりし吾心
愁ひは消えぬ、ながめては
また新たなる悲哀の
湧きこそいづれわが胸に。

さみしき孤獨たのしみて
人の面わの厭はしう
世の冷たさに堪へかぬる
吾は汝の友たらん
終日山に登り來て。

人とうまれて幸薄う
泣きて世を経る宿命かや、
苦痛の形もたむより

せめて花とも生ひもせば、
思へば神も恨みなり。

曉あけに開ひらきて夕ゆふには

萎しぼむもよしや美うつくしき

命いのちなりけり、やよ董すみれ

獸けものの足あしに踏ふまるとて

春はるの子こなりし、短みじかくも。

平和へいわのち小こき世界よとはこれ

仲間ともと容いれまじ花はなの輪わに、

願ねがふはゆるせ一ひともとを

所ところ狭せくともわが庭に

移うつし植うゑては慰なぐさまん。

否いなとよ董すみれ、けがれたる

衢ちまたの塵ちりぞいたはしき、

他あたなる草くさの花はなつまば

憂うれしや捨すてんの恐おそれあり、

日影ひかげよ、視み射やしそ泣なきて別わかれむ。

同情

曠野に働けるふたりの囚徒
荆棘と鬼薊にかけし蜘蛛に
美し光か、小蝶をとめを
可憐の情寄りて破りぬ。

飛び去る蝶をながむる二人
何時かふたつの苦魂釋かると
身と身と繋ぐ重き鐵鎖の

端と端とを握りつ泣きぬ。

春野のうれひ

軟風は眠りぬ、花の床、
蓮華草野のさまよひや、
かへりみすれば青草に
すでに何斗の血を灑さし
紅一色の花の徑。

蹈めども、行けども、歡樂の
胸に湧かぬぞ恨みなる、
趁へば且つ消え、たゆたへば
また現はるゝ糸遊の
野の邊はてなきわが迷ひ。

蝶よ、白羽の舞童
汝も迷ひの弱姿、
花の枝、葉かけ啼く鳥よ

汝もわびしき現世の
相に泣くか春の歌。

朱き花唇、香を吐きて
人情の冬と世の闇に
醒めしを更に酔ひねとや、
魔草、毒草、茂る世に
なに戀草のまどはしぞ。

あはれ、趣味なき老の野よ

仇なる花も何の榮、
市を捨てにし若人が
胸の青春誰か知る—
炎うづまく高潮の。

仰げば寂し天の虚洞、
あゝめぐる日輪の彩もなう
固く冷えたる地の上に
薄き光をもらすかな、
雲は流れて水の如。

わが目かわきて火の如く
行けども、踏めども、げんげ野や、
あゝ花燃えず、樂まず、
地獄よ、紅蓮の火を噴きて
榮なき人の世を照らせ、
火の野に焼けて吾は還らじ。

梅花

嗚呼、北國の冬深し、
名知らぬ山に雪白く
雲の彼方か故郷は、
流離になれし身ながらも
目に觸るものを淋しくて
啼きて胸瘖す寒苦鳥、
命も衣もいと薄き
袖に涙の氷るかな。

人の心や冷固けれど、
春に先だち梅の花
咲きて佳人の微笑の如、
人の言の葉異なれど
清き香ひぞ懐かしや。
あゝ、土のあるところ
花やなからむ何處にか
慰藉なからむ人生に。

波濤を望みて

秋空、雲の飛ぶ如く
孤身飄々さすらひて
波は遠鳴る和歌山の
城の天主の下にして
露地にわれは倒れけり。

枯葉隠れになく鳥の
うたは晩歌と聞かれつゝ、

大樹どよもし颯々と
風は、土にぞひれ伏せる
頭のうへを吹き過ぐる。

嵐の中に聲あるか
かしら擡ぐる西の方
紀の川下は海原や、
遙かに高く白浪の
雪にも似たり逆捲ける。

沈みし心にはかにも

波の如くに昂まりぬ、
腐れし社会には鹽となり
注がむかなや、わが魂は
世を覆へす力得ぬ。

嗚呼、荒漠の海にして
「自然」の情と教へあり、
さはれ、自由の洪濤を
揚げて進まむ、愛を地に
ああ滔天のきはみまで――。

花賣女

大原、霞にたち出で、
牛くる道を朝幾里、
流れは清き加茂川の
橋を渡れば、花の聲
戸も明けがたの京の町。

黒髪に載せたる花の箕
花は重くも、そが頭

愁うれひ悲かなみなかるらん、
花はなは召めさずや、美よき花はなと
女をんな、生な計たつきのしをらしや。

黄きに紅くれなゐの花はなの環わに
露つゆの光ひかりの玉たまを懸かけ
さてしも廣ひろき花冠はながむら、
木綿もめんづくしの姿すがただに
君きみし女王にやわらと名なに呼よばむ。

束たばねて幾いく金そ、花賣はなうるも
心優こゝろいなるゆかしさよ、
都女みやこをんなら、門かどの戸とに
ねくたれ髪かみを搔かいあげて
女王にやわらの裾すそにひれ伏よせな。

雞の歌

革命かくめいをそれ雞にぼとりの

聲になぞらへ歌はん乎

眠むる天地を一聲に
のどけく高く呼びさます
力はにたり光なき
死せる此世に聲揚げて
生命をよばふ人のごと

暗き埒に獨りさめ
光を慕ふ眼のさまは

自由の燭手にとりて
闇世を照らす人のごと

いぶせく狭さねぐらより
暗を破りて鳴く聲は
世を導かむ英雄の
あぐるに似たり呱呱の聲

空にきらめく星の色
地には勇みの雞の聲

やがて其の星消えゆかば
黎明うまる雲裂けて

朝暎東に輝きて
人のつくりし晷の
脆きにもにぬ紅の
鶏冠を照らすあさぼらけ
小だかき丘にかけのぼり
力をこめし羽たゝきに
いまはと高く鳴き渡る
姿の優にけだかしや

野に出て餌をあさる時
毒の利鎌の首たてゝ
ひそむ蝮もかひなけん
纖弱さ草に威をふるふ
阜蝻の騒ぐをかしさや
義人一たび世に出てゝ
風にも堪へぬ民草を
蹂り枯らする奸物の
影をかくすに似たる哉

矛の形の黄距もて
敵に向へるさまみれば
革命軍の兵士の
血を見てやまぬ如くにて
神の稜威を剣にぬり
不義を斃すが如くにて

薄き羽がひのそがなかに
ひとしく雛をへだてなく
守りそだつる愛情の

火炎もゆると誰か知る

睦じいかな牝雛に
心くばれるふりをみよ
餌をわかつの優しさは
鳥と鳥との戀なれや

偽善の白衣身にまとい
媚ぶる鸚鵡の舌なくも
人をいましむ言あり

籠にありての静けさは
民の頭に殘虐の
斧振り上げし暴君が
肘をとらへて牢獄に
埋められにし人のごと

餌ふりまきし人の手の
喉に觸れて悲鳴して
死眠に落つるそのさまは
民權自由を唱へたる

涙と血との大丈夫が
絞殺臺の朝露の
光と俱に消ゆるごと

今われ歌をうたふ身は
あやめもわかぬ闇の世に
自由の光輝さして
天地に満つる歡喜の
聲涌く日をば待ちかねて
雞と共音に歌ふかな

山茶花

空や悲しき夢みけむ
降りてはれたる冬の雨、
雲間をいでし月かけを
うけて光るは山茶花や、
草にすがれる蝶の如
身を顛はせぬ、をのゝぎて。

木蔭に倚りて吾れ泣きぬ

「神よ、わが世にさずきし
靈魂をぞとれや、美はしの
花の命を保てかし」
祈る顛に一雫
花の涙のかゝりけり。

雲に與ふ

限りもあらぬ青空に、

雨とならむの力なく
迷へる孤雲よ、いと高き
白き翼よ、大空に
影を潜むる巢やあらぬ。

鳥の小さきは鶺鴒
その巢に似たる山々も
天の騎見を容れざらば
雲よ、來ずやは吾胸に—
人のはかなさむねといへ。

花や泉や明けけれど、
深き憂愁と悲哀の
晴れまもあらぬおのが胸、
雲よ、このまば低くとも
心の空に宿れかし。

あゝ人間なれば消ゆるなき
塵のうれひを拂ひてぞ
雲よ、抱けよ永久に、
いづれ小暗き胸ならば

天なる雲に蔽はれむ。

小 囚

泣きて幸あるものならば
つぶるゝまでも泣けよかし
運命は狭き金網に
鼠は狂ひもがけども。

哀れなるかな渾身の
力をこめし働きに
鐵碎さうるとても
汝に悲き死の門の
鍵を盗みてもつ人の
心根いかで裂さうべき。

人の嵐に敢へなくも
あだに散るべき花ならば
今ぞ情なき鐵に

恨みのいきをかけよかし
世に疎まるゝ囚人の
檻に血を吐き倒るごと。

醜き汝がはらからの
生命の露をなめんとて
貧しき人のパンゆゑに
罪の闇路に入るとく
暗にひそかに來るとき
匂をはなて屍の。

義人一たび血を流し
罪に亡ぶる人の子の
救の道にゆくごとく
よしや冷たき醜類の
水と鹽との血なりとも
人の詭計の術に落ち
死の味なめんはらからの
免るゝ智慧の香をそゝげ。

陰府の響の工場に

あたらら少女が朝夕に
母となるべき血と肉を
涙にかへて織りなせし
綺羅や錦を着かざれる
虚榮虚飾の貴人は
白晝にも不義の網を張り
富の小鳥を捕へずや
貧しき人や乞丐らの
遺骸は犬の屍と
土にまみれて並ぶとも
賤しき物と顧みず
荆棘と石とにくまれたる

牢獄の裡に人々の
叫べる聲の聞えずや。

死の穴みゆる悲しさに
狂ひ戦慄くわざなるも
鐵やぶる齒のあらば
榮華にあまる金銀の
器具をなぞて粉にせざる
目影さへぎる高殿の
礎石などか砕かざる。

されども奈何、運命の
車はあとにかへしえん
あゝ憐れなる鑛夫が
闇黒と毒氣と戦ひて
命の軍破るゝ時
光明仰ぎて微笑むがごと
安けくあれと思へども
ひかりは汝のものならじ
小さき胸に溢れくる
悲痛こゝに盡さずとも
憂ふるなかれ永切の

火にて焼かるゝ恐れなければ。

孤愴吟

蒼空、遠く渡る鳥
われに長翔らん思あり、
北に一片走る雲
吾も高飛ぶらん情あり、
愁ひさみしき目をあげて

信濃のあたり眺むれば
雪げもよひに薄明り、
浅間の山に火の神の
舞踏ふや、火炎を蹴散らせて
煙を天にたてぬらむ。

春は曠野の花筵
秋は鶉の宿となる
若草萌ゆか雪の底、
嘗て鴻歌す旅の朝
山の威靈に驚きて

髪もさかだち五尺の軀
虹なす熱氣注ぎしを、
天の日よ恥づ、わが姿
塵の市井にうらぶれて
歌なく、血なく、涙なし。

山下、暮を駒曳いて
笠垂れまごの行くが如
憂夜を夢にいくたびか
戀しの麓めぐりけん、
あゝ聖き火の祭壇よ、

都の山は春の色
青く、哀しき眼にけれど
何、死の蛾眉の慰樂ぞ、
淺間山よ、わが胸火は熄えて
残る心の灰のみを
再び照せ——火花燃ゆべく。

犠 牲

山紫に、水白き
西の京なる西の野に
小さき牧場の立てるなり、
胸病む人と幼児に
乳汁與ふる犠牲の
山羊こそ飼はれ、鳥が啼く——
草緑なる丘の上、
晝の光に、毛の長さ
女山羊遊ぶよ柵の中。

すこし離れて島原や、

夕つくく鐘の音に
人ぞ思ひに沈む時、
燈紅き高樓に
桐檔姿、美はしき
人の犠牲現はるれ、
戀と花との色里に
あゝ子を産まず、乳も出ぬ
哀れ女の欄干に。

紡績工女

東の窓よりながむれば
山はみゆなり故郷の、
西の窓よりながむれば
河はみゆなり流れゆく。

工場の中は塵たちて
雪と降り舞ふ綿屑は
髪に愁と積りつゝ

脚は立木よ折るゝまで
機械操つる苦しさを。

女の身にて猿啼く
山は一夜に越えもえん、
嫁入すべく金ためて
衣をも帯も櫛さへも
買ひて歸らむそれまでは
家の戸あけんものかはと
誓ひて出てし我村の
土をいかでか踏みうべき。

涙の珠のかずよりも
多き痛みと悲みに
骨は刺されて肉そがれ
かくてある日の耐へがたや。

『つらいしごともの』

今晚かぎり……』

節おもしろく歌へども
鐘の響にさまされて

臥床はなれば哀しやな
地獄にゆくらむこゝちして。

東の山をいで、太陽は
西へ西へと月もまた
われはひがしの故里に
かへるもつらし西の方
水に入るべき運命かと
夕暮ごとに窓に凭り
川にむかひて泣く身かな。

螢を放ちやりて

螢は行きぬ光りつゝ、
螢は去りぬ音も無う、
罪を懺悔ひたるいと若き
女囚牢舎を出づに似て
夜半にひそかに放ちけり。

冷たき室の燈火の
やゝに消えゆき唯一つ

残る火花の散る思
はかなき虫の悲しさに
涙の目もて見送りぬ。

闇を慕ひて飛ぶさまよ、
暗黒き時世に勢力ある
奸雄のごとく舞へるかな、
明日の運命を知らぬ身の
樂しげなるぞ憫れなる。

夕、逍遙の歸るさに
橋の上にし佇めば
流るゝ水のほの黒う
かすかに白き石垣の
草に光るは汝なりき。

自然の性のまゝなれど
照して何のかひもなう
やさしき影の姿をぞ
命は薄き紙片に
包みてあはれ吾家に。

時は來りぬ、今はとて
懼れもあらず盜賊も
仇の童も夢枕
心無の境ぞ、羽ふりて
こゝろのまゝに遊べかし。

晝は疲れし足をひき
犬にもしかぬ乞丐らも
安き眠の中にあり、

心飢ゑたる吾はしも
睡眠の富も多からじ。

木の葉に露は珠の如
往かば吸はむにまかせたり、
地の上たかく迷ふとて
星に望みをかく勿れ
とても叶はぬ願ひなり。

弱き小蟲を殺す兒も

むごき運命に捕はれむ、
断頭臺の刃より
鋭き「死」の手くだり來ば
同じく脆き花と花。

顔容美はしき啞娘
聲なき身こそ恨みなれ
汝よ小さき鳥ならば
いかに哀しく歌ふらむ
詩人ならば如何ならん。

ゆふべ涼しく籠に閉ぢ
風鈴椽に鳴るところ、
賞づる市人、天地は
苦痛、煩悶、狂亂の
嵐騒げる檻ぞかし。

行燈めぐる灯蛾
これは光を戀ひて死す、
闇の女王よ汝が領に
今夜ばかりも輝けよ

清き遊びのよからずや。

書よむ窓の戸をあけて
涙の目もて放つごと
天の戸ひらき大神よ
渾沌の世の創りに
人の魂はなつ時

蛇には蛇の氣もあれや、
人に靈を與へたる

神よ、恵もありもせば
肉の重荷の永久に
人やかばかり迷はざらじを。

葡萄酒

親しき京の友よりぞ
送りし文のかたはらに
「富士は眞白よ、裾野には

七草咲くや、雪や降る、
甲斐はよき國君住みて
葡萄の甘き酒を酌み
樂しく秋の月日見る

緑葉、雲と棚引きて
峽は葡萄によき處、
人の情の冷たさに
苦き涙をわれは飲み
深き悲しき味に酔ふ、
葡萄は美酒と醸されて

故園

山を出づれど、何時かまた
吾は還らん——友があたりへ。

残んの光華やかに
紅き夕陽の沈む時、
熱き額を地にたれて
はるく、洛に入りみれば、

古郷の秋は暮るゝかな。

淋しき目にも懐かし、
愛宕の山や、比叡山
狭霧に腰を纏はせて
昔ながらの平和の
姿を天に聳ゆなり。

湧き出る水の清ければ
こゝなる女肌白う

みやびの男優しくも
情は薄し、衣飾り
往き來ふ人の面識らじ。

名所、ふるあと、いかならん
衢は大厦いや榮え
物質みなこゝに輝けど
あゝ美と善のうちつれて
去りにし跡ぞ嘆かるゝ。

空も愁に曇るらむ、
傷もつ胸に泌みぬとも
故園の風のうれしさよ、
涙に似たるふるさとの
雨に濡るゝもおもしろや、

流るゝ水や、行く雲や
さすが穩しの山城や、
世にさすらひの非運兒の
ひまなき足に比ぶれば
動くともなきそがさまや、

夏は緑のしたゝりし
御苑の杜の陰ゆけば、
埒につどふ夕鳥の
吾に謳ふにあらなくも
歓迎の歌と聞かれつゝ。

秋の木の葉の散るが如
一家哀しき別れより
われに古巢はあらねども、

元の「自然」を宿とせば
今宵の夢や、すからん。

秋も静けき平安に
初めて戀の思あり、
鐘の響や、星の色、
青き光の月かげに
疲れし胸をいやまし。

嗚呼、流落に飽きし身の

明日は都を立出て、
また憂きことの堪へがたな、
母の御墓の側に
永久の膝にぞ寄りて眠らむ。

星

春の黄昏、花少女
細戸、美目を見るごとく

今宵も大空にあらはれて
哀しく光る青き星、
天なる憂ひ——朧暈より
淨露ぞ降らしも、またゝきに。

満星の公子らに友も無み
微弱き彩容をめづるなれ、
さはいへ寶珠の高御座
君や天人、放浪の
薄命の上を照すかな、
花なき荆棘——墳墓の行路。

愛の眞泉掬まなくに
すゞろや胸に湧く熱情
沸溢れば甕の碎けむを
せめても星にうるほさん、
靈魂、かへる天の樂園
慕ひてわれや朽枝の啼鳥。

月帝、強う輝臨いて
小き玉座は滅ぶ如、

いま浮雲に消えてけり、
星よ相憐れめ、吾もまた
愁の雲に常隠れ
たまに顯世ぞ見る孤星。

血、涙、心

ラインの岸にあらねども
甲斐は葡萄の産地なり、

醸せる赤き葡萄酒の
芳香りて價貴くも、
こゝなる人の血や卑し
空なる瓶か血はあらじ。

山を穿てば水晶の
きよき明らの石あるも、
胸の心に光なし、
富士の裾野に白露の
乾くひまとてあらねども、
こゝなる人に涙なし。

嗚呼、甲斐のみか、美しき
日本島根に今はしも
清き心と涙なし、
杜鵑、千古に血を吐くも
薔薇や花は紅くとも、
人に血なさを憾みなる。

森のさすらひ

眼うるみて頬さへも
血の氣さめたる人の子よ
力もなげにしをれては
あまりに弱し若人よ
雪にも耐ふる常盤木の
われの縁にあやかれよ。

軍ごととしてうなる等が

遊あそびし岡おかに銀杏ぎんぎょう葉はの
黄金くわんごんのごとく降ふりしきて
名利めいりに奔わしる今いまの世よの
痴人ちじんの夢ゆめや示しめすらん。

空そらに群むれゆく渡わたり鳥どり
あちつく杜もりはいづこそや
苛政かせいに堪たへぬ國民くわんたみの
あだに墳墓ふんぼの地ちをすてゝ
自由じゆうの里さとをめざしつゝ
急いそぐに似にたり旅たびの道みち

殘紅ざんこう、色いろにひかりなく
姿すがた哀あはれの楓葉ふうえつよ
歡樂くわんらく、時ときは短みじかくて
權威けんゐの光ひかりはかなくも
消きえてむなしき虐王ぎやくわうの
臺榭たいしゃの跡あとに似にたるかな。

木この實みの甘あまき盃さかづきの
かゝれる枝えだにうちつどひ

小鳥は歌ふ樂しげに
神に感謝を捧げつゝ。

細き烟の料にとて
柴を拾へる賤の女は
喜びいろに溢れつゝ。

木の間にみゆる茅の屋は
其の日くくのなりはひに
冬構へする暇もなし。

一むら白く輝きて
尾花は風になびきつゝ
王者の銀の盾のごと。

あれし葎のそが中に
名もなき花の黄に咲きて
優しきふりのゆかしさよ。

葉の散りはてし木のむれは
人馬瘦せたる荒村の
都に遠く立つがごと。

衣は薄きうなる子が
袂を満たすさまじくの
木の實はマナか古き代の。

雲に聳ゆる松の樹の
緑の兜いかめしく

鳶にまかれて立つさまは
蛇の智慧もつ俗衆の
毒手のからみ忍びつゝ
義人世にある如くなり。

明日は霜にて凋むとも
今日のはえにと復り咲く
花に貴きさとしあり。

西に東に吹く風の

調べに鳴りてまろびゆく
木の葉は似たり輕薄の
才子よ世をば渡ること。

朽木を出てゝまたもとの
くちきに歸る蟲みれば
罪に生れて罪に死す
人の上こそ思はるれ。

枯れたる草と朽ちし葉に

見えざる春の光あり
生るゝ春の豫言あり。

小鳥の胸をさわがせて
高き梢に鳴く百舌の
聲は血に飽く爲政治家の
ゑばを求むる聲に似て。

霜に枯れたる叢に
かすかに残る虫の音は

榮華の末の亡國の
歌をば聞くの思あり。

時雨と風のえものもて
秋の軍の寄するとして
山の姿は變らじな。

澄めるは何の鏡ぞや
ものゝ屍を載せ去りて
生命に運び行く水よ。

憂にとぢし我胸に
希望の波の湧きよせて
「愛」と「平和」の明星の
清き光を眺めつるかな。

袖はいとはじ

鹿にもあらず人の身は

紅葉にあらじ小夜時雨、
愛に輝く神の目の
星より落つる雫かや、
悪魔に似たる浮雲の
振りまくわさか、人の世に。

物影あらぬ闇に立ち
獨り濡るるもおもしろや、
人の心の空にふる
涙の露ぞ消えやすし、
限りもあらず變りなき

大空の雨よ袖はいとはじ。

空 罌 買

春の波寄す品川の
町の家並に潮の風、
浮世のからき生活に
買ひて集むる母と子が
幸も空なる空瓶よ。

碎けて脆き人生や、
細き腕に、青蔦の
抱ける重き實の如く
筈には薄き運命の
をはりに似たるガラスかな。

春の夜毎の宴會に
人と倒るゝ亡骸の
ビールの罍や、耀きし

ホヤのこはれも買ひませう
冥府の使者の聲の如。

昔おもへば長かりし
髪に被れる手拭の
中に幾計の智慧かある、
胸を掩へる衣一重
裏には知れぬ悲哀や。

花の姿にあらねども、

女をみなの恥はづる稼わさ業ぎみれば
夫つまに死わか別かれし寡かよ婦よの身みや、
人ひとと社しや會くわいに捨すてられし
屑くづの屑くづ買かふをかしさや。

沖おきの波なみ間まの舟ふね人びとに
穫え物ものあたふる神かみあらば、
險けはしき路みちの世よを渡わたる
二ふたつの命いのちまもりてよ、
惠めぐみを玉たまへ、策さるに満みつべく。

心は胸に

夕ゆふ焼や紅あかし西にしの空そら、
岡おかに登のぼりて見み渡わたせば
かなた、緑みどりの森もりの上うへ
千ち羽ばの鴉からすむれて舞まふ。

沈しづめる心こころいつしかに
翔かり行ゆきけり抜ぬけいで、
天あま津つみ國くにに遊あそぶ如ごとし

静しづけく舞まひぬ輪わにつれて。

光ひかりををさめ日はいりぬ、
鴉からすは森もりに隠かくれつゝ、
獨ひとり寂さみしく遅ち々として
心こころは再またび胸むねの中うちに。

雨 雲

夏なつの夕陽ゆふひの華はなやかに、
西にしのみ空そらに漠ぼく々々と
いま雨雲あまぐもの起おこりけり、
地つちに心こころも渴かわき伏ふす
吾われは双もろ手に雲くもを呼よぶ
鳥とりの翼つばさをあぐる如ごと。

雲くもに腕かひなを捲まきつけて

空翔らんと思ふかな、
激しく雨のおつるたび
われや濺がむ、血と涙
憎きに血をば、哀れには
泪流さむ瀧のごと。

飛ぶに羽なき身ながらも
狂ふばかりに祈るなり。
雲のはかなく消えん時
吾もきえなむ、もろ共に、
涙と血をば吐き盡し

死ぬる運命のわれなれば。

日向葵と人生

露の睡蓮、泣きて笑むを、
こはいたましや、燃ゆる日向葵、
旅路の果に疲れ信徒
眼くるめくさまか哀し、
天つ日輪、戀へど身に根

金髪もほしけぬ、雲はいそぐ。

涙、髓溶く熱血こそ湛へ
人と生れてわれは幸か、
清き、高きを、憧るこゝろ
むくろ朽つれ、地球よ亡ぶも
めぐりて光、趁へば樂し、
月と星とのかぎり——そはあれ。

戀しの雲

髪こそみえね、顔みえね
雲の少女の戀しさよ、
かひなき人の手を伸べて
嗚呼いくたびか、雲の裳
捉へんとては仰ぎけむ。

いかにあやしき吾が心、
地に息する人よりも

空の乙女に戀すとは、
姿かはれど自由なる
氣高き雲の美はしや。

黄金、權威の跋扈する
暗黒く穢れし土蹴りて
無限の天に登りたや、
あゝ風となり雨となる
雲と下界に臨みたや。

家をも知らね、縹緲と
行方定めぬ雲慕ふ
世にもはかなき戀やこれ、
雲を思ひしその日より
心は天にうつゝなり。

ゆく雲終

著作年表

馬 上 哀 吟 (三十六年六月)
 糸 車 髪 (三十七年十月)
 雲 娘 (三十六年十二月)
 蝶 賣 菊 子 (三十六年十月)
 白 菊 子 (三十六年三月)
 雪 磨 ぐ 女 (三十六年一月)
 米 磨 ぐ 子 (三十三年一月)
 石 磨 ぐ 子 (三十七年十一月)
 秋 磨 ぐ 子 (三十七年十一月)
 墳墓を撫して (三十八年六月)
 河 邊 の 嘆 (三十五年一月)
 關中田鼠に告ぐる歌 (三十六年八月)
 月 と 吾 と (三十三年二月)
 支那パイプ賣 (三十八年十月)
 少 女 と 雀 (三十四年四月)
 血 と 別 る 歌 (三十五年二月)
 葦 と 別 る 情 (三十八年二月)
 同 春 野 の う れ ひ (三十六年一月)
 梅 花 (三十六年一月)
 波濤を望みて (三十六年十二月)

花 賣 女 (三十七年八月)
 雞 茶 花 (三十五年五月)
 山 茶 花 (三十六年一月)
 雲 興 囚 (三十二年一月)
 小 興 囚 (三十八年三月)
 孤 槍 吟 (三十六年五月)
 織 績 工 女 (三十二年三月)
 紡 績 工 女 (三十五年一月)
 螢を放ちやりて (三十五年一月)
 葡 萄 園 酒 (三十六年十一月)
 故 園 酒 (三十六年十一月)
 星 園 酒 (三十八年三月)
 血 涙 心 (三十六年三月)
 森のさすらひ (三十五年一月)
 袖はいとほじ (三十四年十月)
 空 罎 買 (三十四年二月)
 心 は 胸 に (三十六年八月)
 雨 雲 (三十六年八月)
 日向葵と人生 (三十八年八月)
 戀 しの 雲 (三十六年三月)

最新刊詩集

浦瀬白雨君譯	ウオルツヲオスの詩	全一册
片上天絃君譯	テニソンの詩	全一册
田山花袋君譯	キイツの詩	全一册
横瀬夜雨君著	花守	全一册

東京隆文館發兌

20047

明治三十八年十二月二十日印刷
明治三十九年一月一日發行



發兌元

著者 兒玉花外

發行者 平山勝熊

印刷者 佐久間衡治

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市京橋區尾張町一丁目

會社 隆文館

隆文館發兌文學書類書目

夏目漱石序 浦瀨白雨譯	坪内博士書簡 片上天絃譯	田山花袋譯	横瀨夜雨著	草村北星著	廣津柳浪著
ヲオヅヲオスの詩	テニソンの詩	キイッの詩	花	相	を
郵定價金二十五錢	郵定價金三十錢	郵定價金五十錢	郵定價金四十五錢	小包料金七十五錢	郵定價金六十五錢
怨	守	詩	詩	思	氣
(六版)	(三版)	(三版)	(三版)	(三版)	(三版)

黑法師著	德田秋聲著	小栗風葉著	渡邊霞亭著	稻岡奴之助著	德田秋聲著	草村北星著
新	か	う	次	海	病	澄
細	ひ	さ	郎	大	戀	子
君	の	ね	島	王	愛	子
(四版)	(三版)	(三版)	(再版)	(再版)	(三版)	(改訂五版)
郵定價金六十五錢	郵定價金六十五錢	郵定價金六十五錢	郵定價金七十五錢	郵定價金六十五錢	郵定價金六十錢	郵定價金六十錢

◎ 加藤眠柳著	◎ 田口掬汀著	◎ 小栗風葉著	◎ 美村北星著	◎ 草露子著	◎ 江見水陰著	◎ 廣津柳浪著	◎ 伊藤銀月著	◎ 伊藤銀月著	◎ 藤銀月著	◎ 海國
彩	の	丈	の	夫	の	と	海	本	日	海
色	人	夫	人	子	仇	史	賊	本	日	海
(再版)	(新刊)	(上下)	(再版)	(新刊)	(上下)	(四版)	(再版)			
郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢	郵定價金八十五錢

▲膨脹的大日本唯一の處世雜誌▽

雜誌界の米の飯！

▲毎月二回一日十五日發行

活動の日本

價定

- ▲成功立身の良師つて任じ品性の修養を教ふる活動の日本也
- ▲致富處世の指針、經驗精勵の福音を説く活動の日本也
- ▲活動的青年の爲に實力發展の舞台を教ふる活動の日本也

▲一冊金拾錢
▲郵稅壹錢
▲三冊前金壹圓廿錢
▲郵稅共壹圓廿錢
▲四六二倍大形
▲上等紙印刷

▲活動的國民は之を讀め▽

青年文壇の覇王

詩趣滿幅 ● 評論精嚴

▲東洋唯一の青年文學雜誌 ▼泰西名畫文豪寫真入 ▼

美文藝術雜誌 新聲

▲每月一回一日發行 ▼
▲定價一冊金拾五錢 ▼
▲郵稅金壹錢五厘 ▼
▲六冊前金九拾四錢 ▼
▲三冊前金一圓八十三錢 ▼
投書歡迎

新聲は新聲也文壇の中立派なり無所屬なり黨なり臂を天下の青年文人と
てり遠慮會釋なく天下の文壇を馳驅せん天下の機運の率先者たる常に
青年の任務なり今や活動的新日本の勃興的機運に我新聲が
將來如何の方面に發展し如何の方面に精進す請ふ就て之を見よ

諷刺深刻 ● 體裁優美

